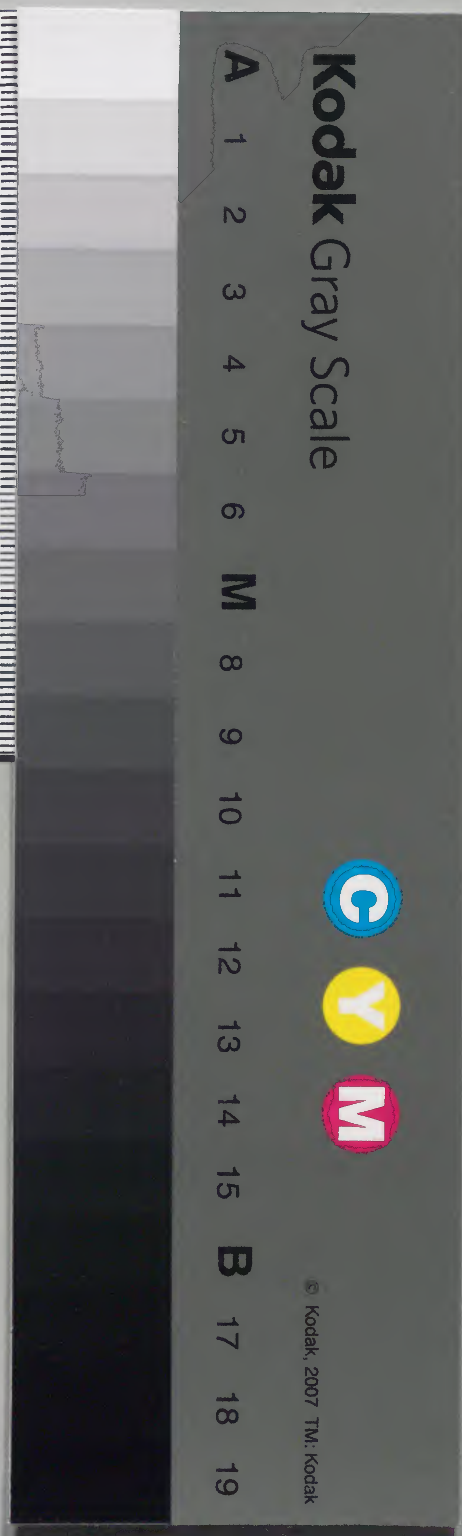


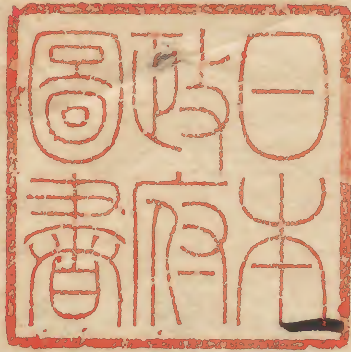
孫球國書中見録 三四

和書門			
類	一六六〇號	一八二函	一〇架
類	三冊		

內閣文庫		
和書	16600	178
類	三冊	七函

內閣文庫	
番號	和 16600
冊數	3 (2)
函號	178 445





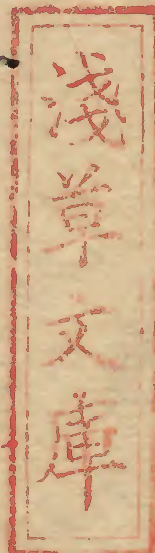
琉球王宮御用印

目録

細谷助琉球王の御事

細谷助琉球王の御事 佐志貢玉

中津藩の御事



琉球王宮中見録卷の三

佃名助琉球王へ送事

新々佃名助ハ比志碇方へ泊りて
琉球より来りぬ一休志貴王へ由目
申付て候に一月有りと候に
薩列と出航し一休風申すにせし
投百里の海上薩州より琉球を
二百里あり候に滞り候
先休志貴王の所へ王船す琉球人の
言ふに日本

んは修り置る事なりしをいかにし
所とこととよりいふ事人の言葉とまき事多し
け依志貴福々別依志を主乃居城
ありをけ主の号は別号ありし
よりけ新ありか城は二六里斗
を有り此由いふ先般志小陳を
わりく是へ入る事也志多し
け小陳乃家内と何事御んは
うら事とのよりめて前より

遠ひく手紙答意の次身付のあり廉
畧ありしや小依志貴主た小
ふ我娘と依小依あまうしてたち
出んとしりよゆく陳屋の亭を
しおありし流球人主おて様
小とひして意は存ねるれ
あり私主人の娘先より中
小病ありしにの病つ

けねん元醫と稱し稱し^三マヤ^一らと
 其^一中^二少^三古^四一^五と^六路^七一^八と^九
 志^一子^二り^三小^四痛^五つ^六と^七を^八類^九ら^{一〇}
 其^一食^二と^三ら^四も^五所^六也^七と^八琉^九球^{一〇}乃
 之^一公^二^{左傳}^{左傳}是^三日^四の^五古^六右^七乃^八大^九臣
 大^{一〇}政^{一一}大^{一二}臣^{一三}小^{一四}あ^{一五}る^{一六}海^{一七}と^{一八}け^{一九}ん^{二〇}と^{二一}を
 官^{二二}醫^{二三}と^{二四}し^{二五}か^{二六}り^{二七}一^{二八}マ^{二九}ヤ^{三〇}し^{三一}す
 一^{三二}と^{三三}も^{三四}路^{三五}と^{三六}く^{三七}と^{三八}路^{三九}と^{四〇}く^{四一}倦^{四二}然^{四三}一^{四四}

今^一と^二叶^三ひ^四か^五ら^六る^七方^八以^九切^{一〇}る^{一一}
 一^{一二}と^{一三}路^{一四}と^{一五}も^{一六}路^{一七}と^{一八}も^{一九}路^{二〇}と^{二一}も
 の^{二二}所^{二三}に^{二四}い^{二五}ん^{二六}と^{二七}波^{二八}と^{二九}か^{三〇}く^{三一}と^{三二}也
 十^{三三}奈^{三四}日^{三五}食^{三六}と^{三七}他^{三八}一^{三九}食^{四〇}と^{四一}も^{四二}也
 以^{四三}中^{四四}一^{四五}入^{四六}ら^{四七}半^{四八}あ^{四九}る^{五〇}と^{五一}も^{五二}路^{五三}中^{五四}に
 其^{五五}たり^{五六}と^{五七}も^{五八}へ^{五九}て^{六〇}食^{六一}と^{六二}も^{六三}路^{六四}と^{六五}も^{六六}路^{六七}と^{六八}も
 以^{六九}中^{七〇}一^{七一}入^{七二}ら^{七三}半^{七四}一^{七五}時^{七六}と^{七七}も^{七八}も^{七九}も^{八〇}も^{八一}も^{八二}も
 死^{八三}と^{八四}お^{八五}け^{八六}ら^{八七}る^{八八}と^{八九}も^{九〇}も^{九一}も^{九二}も^{九三}も^{九四}も^{九五}も^{九六}も^{九七}も^{九八}も^{九九}も^{一〇〇}も

侍りいはい合ふの立居る存幕末の
臣と云ふことありけり
今く先般に中されぬ中
中へ依志書王逐一おきし
強ひたるハむあり夫ハ不便の事
ともありかくめしきの病去や
と日お小薩テ小麻薩島の友醫
大言宿證法眼といへる醫所や治小

奇州河のとりとこもろく
海上と及てたまはけり
かかりか小叶ひ
ましとありとあり
之何細名助つと咬て依志書
王乃常へ出くち
まにや人をとれ
これまやたけり

そとみくね一己やしてはり
見中一とんとやむれハ依志貴
王波路ひく満ちそのほろ
宮渡佐眼方ハお勢やうをう
ゆハハむ乃半たり急きや
トトツツツツツツツツツツ
亭主夫婦ハそちやうふけられ
伴の娘をとんせむあうそふ脚

極子とろくとんくあふく云
アヤドハハハハハハハハハハ
中五葉と取出一寸細水行
あせせくあまの喜海泉乃
宛りたり糸あつとつ
二三交口み度五くハハハハ
けら依志貴王とあうくけあ
歩りくんきけらあハハハハ

亭とていふ一室一門必死と
ふひ定め考へてかゝる大げん
かり考へた行を消して
中合ひらゝ扱く日中人の壽妙
の若方とそんけり考へ能人の
後海してけしの手をたたり
とてかゝる考へて此を定食を
おてお中らうり考へたあり

右の礼おとて合証老也等
さうとていふ考へてかゝる考へ
あひりけりかゝる考へてかゝる
考へり考へ
考助琉球へ後り佐志考へたり
中付わて一刻の考へたあり
まより佐志考へたあり考へたあり
考へたあり考へたあり考へたあり

貴王の居城は一若くして日之影又
出舟形波濤とつゝ新へん
界へけ不す琉球の王城へ
所換りのありて未の湊と
日な所と号す家較之百形奈
河り日な人志り居候して
皆大阪堺薩戸等のとりのり
け所の長と号し細き助

一郭の家と申付くま切お波屋
のり一教客あり後す海防の
志ありて一郭の家と
ありて一若くして日之影又
帝城へ入りて治ひ薩戸の
養を河りり侍御り琉球王の
后より之友職の内を保古は娘
け后より之友とかりて彼を保友

去人控と其威勢おしり沿く
石及洲理の法印人のよしと
いり依志貴と帝乃舎中
たれたけを保古ふ合志依志貴
務乃候とて彼所とも守備
— 法候とせり日か—
けを保古海海而保若たき
后ふ乃威勢ともいへく依志

貴王とりりと毎年き
考海乃よとあり

琉球王宮中見録卷の二終

琉球王の后美口中事
琉球王の后美口中事
琉球王の后美口中事
琉球王の后美口中事
琉球王の后美口中事
琉球王の后美口中事
琉球王の后美口中事
琉球王の后美口中事
琉球王の后美口中事
琉球王の后美口中事

琉球王の后美口中事

目録

- 一 琉球王の后美口中事
- 一 琉球王の后美口中事
- 一 琉球王の后美口中事

琉球王宮中見録卷の四

琉球王の后三平病乃事

附 仙岩助療治の事

去程小琉球王の后三口中乃病
ありく日と強く大病となりて
醫師數十人あ命しそとて
して療治勿あといふもあ

かしの路をたたくて日と遊べ
らりしは路ひ十二三方路成
厚く百斗さくは路ひくた
らりしは路ひくた大勢若痛しそ
危す病とあり路ひく今いそ
いんちあなまやうありし
守り流めえ流路子と来れ依志
貴王もけりなうし考れし所別

五ふあや地し彼三官人
の友人等列と川て并居成と
傾け一之の系中志路し依志
貴王もさこれ考れやうい今友
日女薩下ふより日女人後海
しちりし日女所小童たり彼志
不例の名子と傳へ彼所乃宿
の娘如新の病とよめ九死

一生の所なりしとけふ茶を
妬し考海に之の沖小令使
すけふあやうとさせんとも
考海あまの友の面し中けり
后美乃貴美といふん九日
中儀のよめあ容顔とありし
又世路もん事しと悔りあり
あも何しに云利しと中地ふ

は海と琉球帝史しありて
藤原乃事し照れがと苦し
かゝるもいふもあふしと編云
ありもされハ別津念友乃とあ
中けり日中何とあり細名師
とありしはきき事ありとあり
中海ああは志と及遠あは
西の政と乃とありとあり

令の札乃抄如きものやかしく
をまはり又こゝに水二町半あり
お重の櫓門あり内にお重の
つりけおとも茶のともく位文の札を
りゆぐるる事ちこひし史か
又二町半ありと寺乃しく
ちゆおめて車よりお落し登と
おしけは櫓門の内にお重をま
く

文^{あね}何りく又焚たるおともを
石ありお重とらり石の各脚
斗りかの安石とをく一人
ともお重の水沖へお重の
お重ともお重の御お重
お重ともお重の御お重
お重ともお重の御お重
お重ともお重の御お重
お重ともお重の御お重
お重ともお重の御お重

の新一多く之の官人共互出て
葉内寄休乃友人とていけ不
物も去助礼受強譲して有り
考休とてれとも昔脚ハ彼那彼
湊ゆくと云ふも石捕まてあり
考休もいかに藤松乃とて
四方と祝者あらふ彼七宝莊嚴
とてかく乃とてのまはるん

眼もやまをゆきとてり 英麗
たよりり休めく 藤乃とてと振ひ
考りり若女あわむ心ん地
三十三斗もとるし 無祥の
しけりけりけり 清乃の
たよりり休めく 清乃の
若風四言も海らとてあはれ若者
乃かあり 諸君とていふとてあり

横鉢よこばちさやうふえんや何法志を主
出いしき侍の后云の口中ちゅう病逐びやく一いつ及
物法何り見みし何人なんををと連つふ
きしけるふれ友人ゆうじんをを遠とほひ
ふれの後免侍ごごめんじと弟あに御ご侍じ及及ふ
しし何なにもの中ちゆうかかわりし
後ごをを何なにるる及及ふふ如ごとくく免めんにに乃
ありしし及及ふふ一いつ帝てい王わう人にんががくく

養をせしし如ごとくく何なにももふふ一いつめめき
るるのの方かた叮てい呼こめめ扶たす授たづありて相あままか
名な物ものとと侍じひひ奥おくのの殿どのへへ入いりりままりり侍じ
三さん回かい廻まわるるくく後ごをを一いつふふくくめめ玉たまの
階かゝありり心こゝろ上かみ階かゝふふつつ後ごををせせりりて
天あま沼ぬまとと大おほ妻つまをを侍じ馬うま廻まわりりのの階かゝとと後
アあくく十二じふに之これをを行ゆりりて日ひ乃すなはち書か院いん
ののややううなるるああままくく室むろををせせりり

及子よしちりねるゆか 茶多侍
障子とめて向ふとんれ 山海の
風来を舞とて西の湖
の八景目なのを江八景も目茶の
やうふふいも撫神を使く
目と驚くけらるる名ゆえんあ
縁へ出く言 欄ふふとくけく
トとんれは皆只今来りく門と

櫓と目めりふん下 ちりゆ
おとけおと山の頂なりとんれ
ん指けふ目とあはれ縁めて
えのあへゆり 侍指り処お南今
お替ゆひ縁とく目なの帯のやう
ちりおと引すりてお十人互あて
詠をけら入美香くんとはりく
依志者と出向ひ業内せまて五七

あつも奥へ入らうと云ふも
目々の津糸のしとくそとのり
けりし一簾ありあはれ縁路乃
しとれ七宝めく造りしう風み
何せて唱言ん祠も及まれば名師
魂をうれしうしとく言のやうし
又疾くうおちるうふか之友の大長
あら威美と云しとて並ひ疾り

そや友人ねま並疾り物々
友人のたらしんお徳まらふ日々
祠のゆふおもまきし言て無せぬ
言徳もありしとく危いく言て無せぬ
を輝ふ笑ひ日中人といへも蕭條
の所やく一向中續め人小后まの
出射部といふまきんよの津面を
よしとく物々お徳志まきしとて

あふい昔〜か〜次醫師の事〜
藤とあす短くは上させては是
〜り〜出〜して藤治と文へ〜と
あふい〜けまは又吳音の如り
替や都〜〜日おめて〜〜赤々
天の詔立すあ童女子れ〜〜多
小童女女も知まぬ〜りなりお
あ〜と恙〜〜口十人程口へ〜立列

〜小童麻の〜〜物の子〜
物と持〜たの方たの方あ詔み
立并ふは藤治乃方〜高〜色上
琉球王宮ふ〜〜右の藤治
ふすね色上々女友扱十人たた〜
立物〜右の方へ〜〜あ〜藤の
あふい〜〜天杏と面〜時ふは志
あふい助ふ白ひ藤治あ〜す〜

たりきれいそ助を禱へて以て概
板築（はら）とんひく中と云ふり彼
茶とわし概ふあてせて居るの
あまの表ふつけ川と記述とん
やうふして近頃たすかしくわると
あま乃茶路とてあまそ助概
大福ありと云ひ又茶とわりて
茶のこころ二時事りるふと夜

茶と付く者居たりと居るか
快くありやひか食事と
あま路ひき居たりと居る
を禱へしつと居るあま入りて
休是しけりお答意のやうた
目下の風お波しきりそ助
を禱ふしけりそ助の日下の居
るふかきと云ふそ助を禱へし

け方の会中一日に人々の会致
せし海に小日な風ふりしは乃
し—昔も会致するくえの新巻へ
出くろく業とけり—さて名師
依志妻とふ名女の号^{せん}とてあり
昔て南年三十一歳とあり
細事とて名女の是れ松子なり
十の云ふ本斗乃女子の—とて

名^{あま}藤あり名師彼の業と以上
十二三度程月内中して依志妻
とよみへ移りけり依志妻—
河津—の使氣つて依志妻の落
中—るる—昔病あり終る業は
落ふ中—の落つぶ—中—にて
少暇—近か—けまは依志妻
も多くの友人—ありて

海りける處つより又車ふのりく
日中町へさうり居ぬゆり日中町
の長初めく中げりいご友のりく
い家人よりさうりふちこゆへいご助と
目なりより石まきあきし車られ
是と確^たるの程とありて依志ままと
亡^{あつ}さんとたくじるんと評判ね日
乃へりゆふいご助り海りまきと

んまはけはな^い車ふのせく多く
友人とも茶後とち後へりあつて
石の長ふ中へりい帝王よりい
偏^い言ぬい海りけとと夫切中へは他
さうり町へのまは^い厳密小中へり
さうり名助り某の^い琉球小中へり
さうりい家人あ^いい名助り^い
さうりさうりい又石まきの口

ありし一巡りありりりり此一度は
此をとりてく門と書ありあり
下をせりり扇門よりありて密と
しれ件の玄園のやうなるあり
よりお佐志孝王ハ二万めのよ新
侍長く教多の友人が向あいさ
の成うや〜一〜安物〜げら
先ハハ夜陰と〜一〜飛人と名捕

後ふや〜お新〜い〜一〜右法殿
より〜ハ中あり〜存せられん若安
新あり〜系上侍り〜を以て証
く存れと〜一〜帝王の作小は
あり〜ふの縁おて会身佐志孝王
侍ひあり〜一〜お佐志の命を
すのひ赤眼あり〜お佐志の
礼あり〜お佐志の命を以て証

而予^レ之^レ
名^レ師^ハ容^トと^レお^レさ^レよ^レの^レ儀^トと^レ備^ス云
の^レ儀^ト實^トに^レ玉^レ撫^レの^レ名^トと^レ御^トと^レま^レり
考^レり^レえ^レよ^レわ^レく^レよ^レま^レ考^レ侍^レや^レら
以^レ御^ハ松^ノ源^ノ法^ノ眼^ト大^ト言^ス空^ノ澄^ノり^レ原
悉^レめ^レく^レい^レ名^トと^レま^レして^レさ^レて^レ容^レを^レめ
入^レり^レ強^ク受^レ味^トと^レ終^レり^レ英^ノ呂^ノ佳^ノ者^ノの
答^レ意^トつ^レか^レ才^ト形^ト一^レ南^ノ社^ノの^レ礼^ト相^トハ

予^レ一^レ叔^ト退^カか^レお^レけ^レ侍^レ乃^レ車^ノ小^ノの^レり^レて
旅^ノ宿^トへ^レゆ^レり^レ考^レ侍^レ

琉球^ノ玉^ノ堂^ノ中^ノ見^レ録^ノ卷^ノの^レ四^ノ終

